



～礼儀と節度を考える～

平成武師道

〈人間活動学〉

『ヘレニズム期の哲学』

ヘレニズム期にポリスが解体
社会的に不安定、戦乱
人々はポリスの市民意識が薄れ
関心は個人の内面に
安心をもたらす倫理の追究

ヘレニズム時代は約 300 年
アレクサンドロス大王の東方遠征から
プトレマイオス朝エジプトの滅亡まで
ギリシャの文化は東方へ拡大
東方文化の影響がヘレニズム文化

エピクロスは快楽が善
このため快楽主義と呼ばれる
肉体的快楽ではなく永続する快楽、心の安らぎ
真の快楽とは精神の平安
公共生活、政治、心を乱す煩わしき
隠れて生きよ

公共生活を退き、静かに暮らした
だが、最大の煩わしきは、死
死への恐れは心をかき乱す
そこでデモクリトスの原子論を継承
死とは魂を構成する原子の離散
だから死を恐れる必要はない



ストア派は代表ゼノン、ストイック
禁欲主義とは情念や欲望に打ち克つ
すなわち不動心
情念を捨てて理性により真理（ロゴス）と一体
何ものにも惑わされない境地
真理とは人間を含む宇宙の論理や原理
すなわち理性的秩序

ゼノンは自然に従って生きよと説いた
理性の力で自然を支配するロゴスに従って生きよ
自由人と奴隷、ギリシア人と異邦人に差別
理性を皆持つから世界市民は皆平等
それをコスモポリタニズム
自然法を映した普遍的な法を万民法
それは自然法思想
後に世界に大きな影響

山口 貴史